

阿蘇山

概 況

6 月の中岳第一火口の表面的な熱活動は、やや活発な状態が続いていますが、その他の活動は比較的静かな状態が続き、大きな変化はありませんでした。

中岳第一火口は全面湯だまり状態が続いており、南側火口壁下の赤熱現象を引き続き観測しています。また、南側火口壁の温度も 17 日に 307 を観測するなど高い状態が続いています。

噴煙活動の状況

噴煙は月を通して白色・少量で、噴煙の最高高度は 300m 以下でした(図 6)。

地震活動の状況

期間中、火山性連続微動はありませんでした(図 14)。また、孤立型微動及び地震は、5 月より発生回数は増加しましたが、長期的に見ると少ない状態で推移しました(図 2 ~ 4)。

6 月には孤立型微動を 36 回(5 月 14 回)観測し、そのうち最大振幅は 6 日 22 時 06 分の $19.8 \mu\text{m/s}$ (5 月 $8.8 \mu\text{m/s}$) でした(図 7、図 8)。また、A 型地震の発生回数は 40 回(5 月 24 回、図 9)で、主に中岳第一火口の東側で発生しました(図 15)。B 型地震の発生回数は 151 回(5 月 67 回、図 11)でした。

地殻変動活動の状況

GPS による地殻変動観測では、草千里 - 砂千里浜、草千里 - 仙酔峡、砂千里浜 - 仙酔峡の各観測点間の 3 つの基線長に変化は見られませんでした(図 16)。

現地観測の状況

火口底は全面湯だまりの状態が続いています。

南側火口壁の赤熱現象は 6 月も引き続き観測しています(図 17、図 18)。

南側火口壁の温度は、依然 300 程度で高い状態を保っており、17 日の観測で 307 を観測しました(図 5、図 13)。

湯だまりの最高温度は、5 月に引き続き大きな変化はなく、最高は 6 日の 59 でした(図 13)。噴煙は白色で青白色ガスも観測しました。

(温度測定は、赤外放射温度計による)

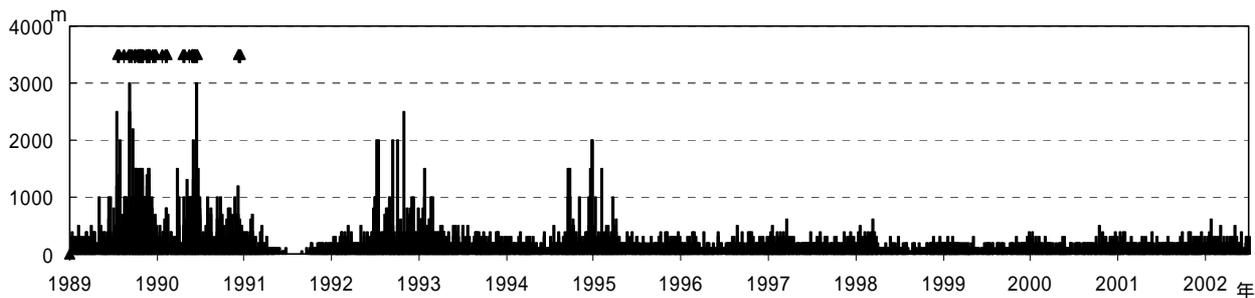


図1 日別最高噴煙高度及び噴火日(1989年1月～2002年6月)

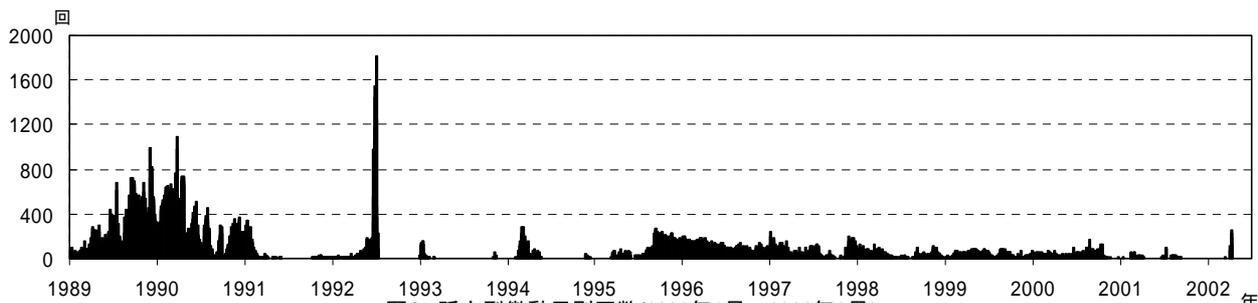


図2 孤立型微動日別回数(1989年1月～2002年6月)

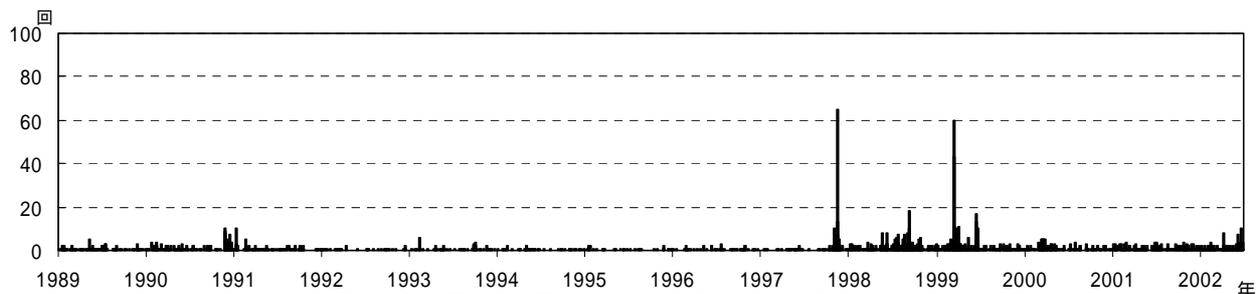


図3 A型地震日別地震回数(1989年1月～2002年6月)

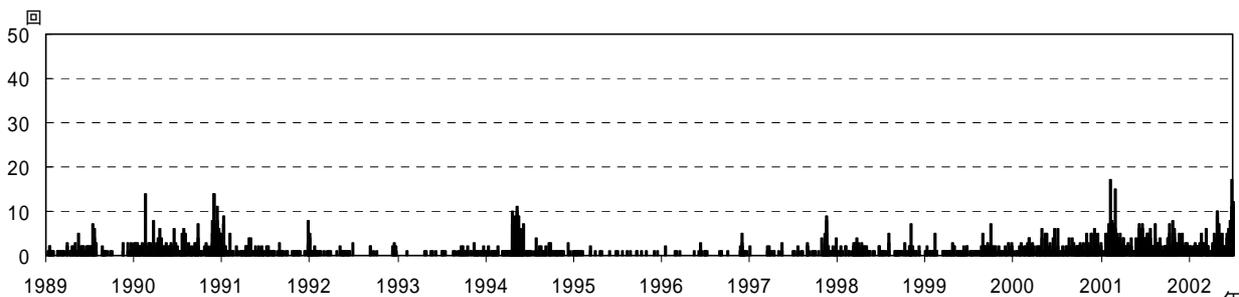


図4 B型地震日別回数(1989年1月～2002年6月)

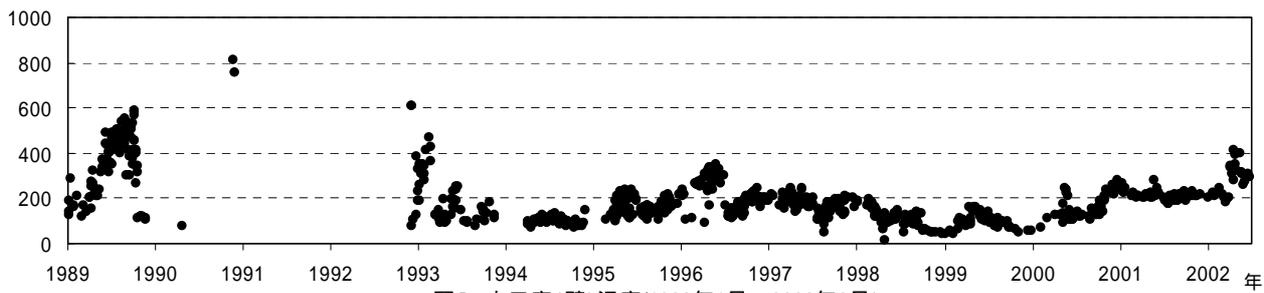


図5 火口底(壁)温度(1989年1月～2002年6月)

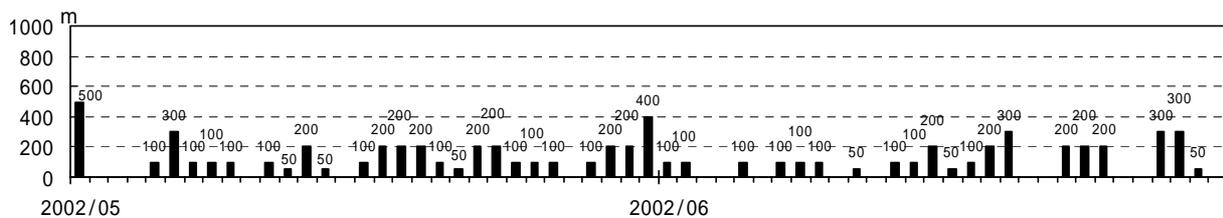


図6 日別最高噴煙高度(2002年5月1日~6月30日)

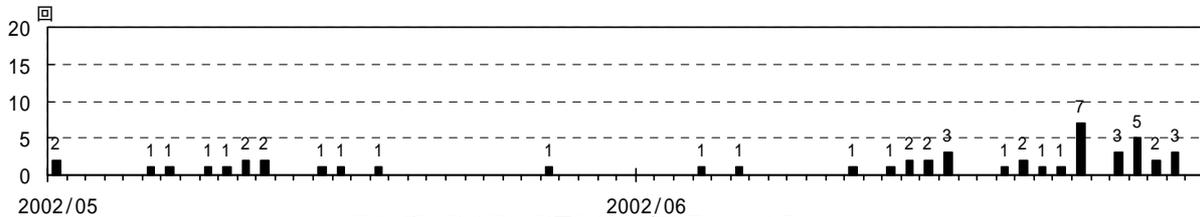


図7 孤立型微動日別回数(2002年5月1日~6月30日)

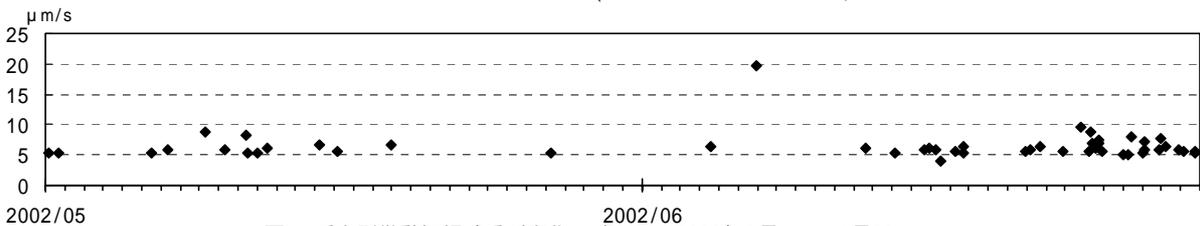


図8 孤立型微動振幅時系列変化(A点N-S)(2002年5月1日~6月30日)

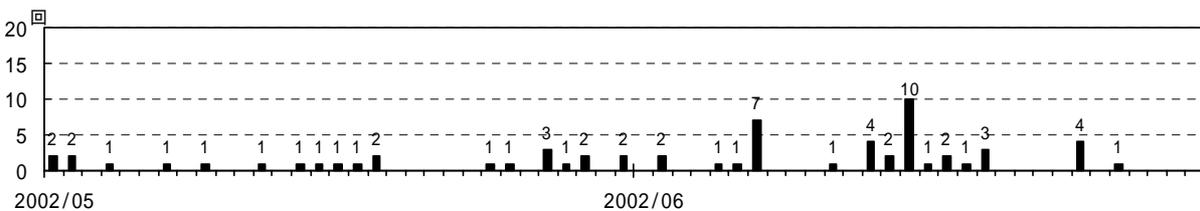


図9 A型地震日別地震回数(2002年5月1日~6月30日)

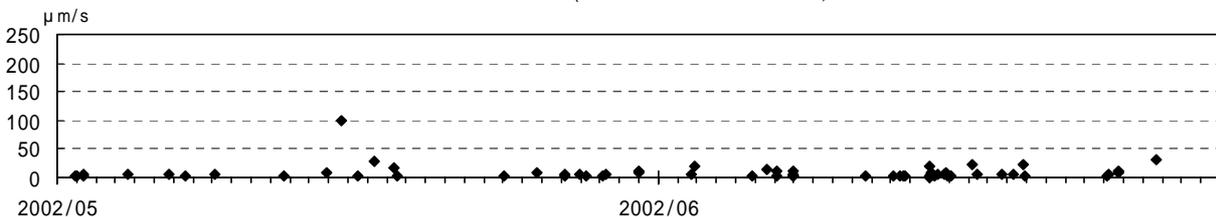


図10 A型地震振幅時系列変化(A点U-D)(2002年5月1日~6月30日)

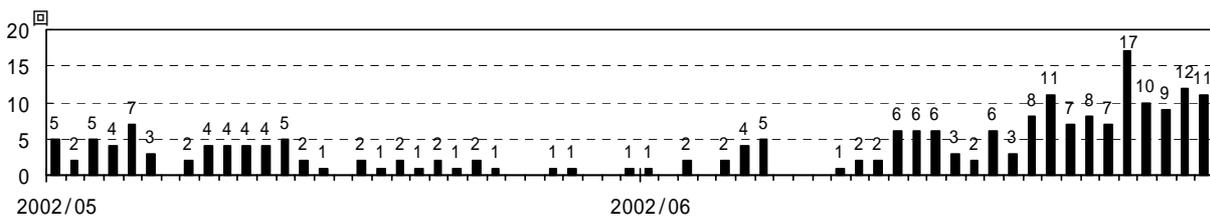


図11 B型地震日別回数(2002年5月1日~6月30日)

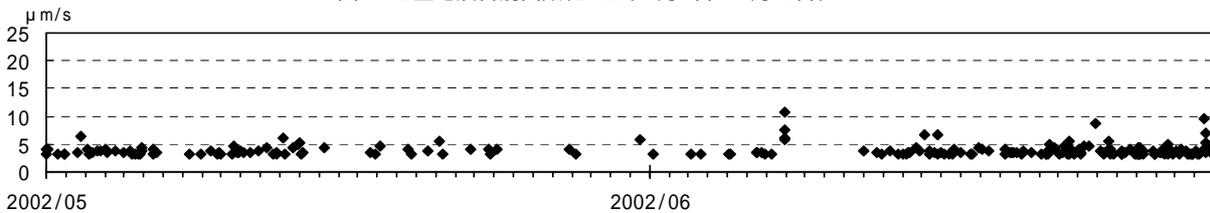


図12 B型地震振幅時系列変化(A点U-D)(2002年5月1日~6月30日)

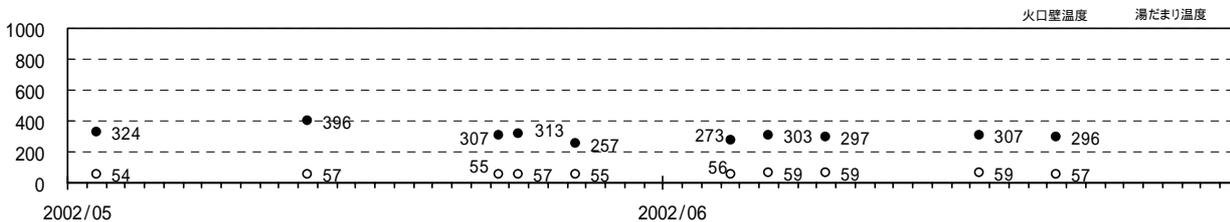


図13 湯だまり温度及び火口底(壁)温度(2002年5月1日~6月30日)

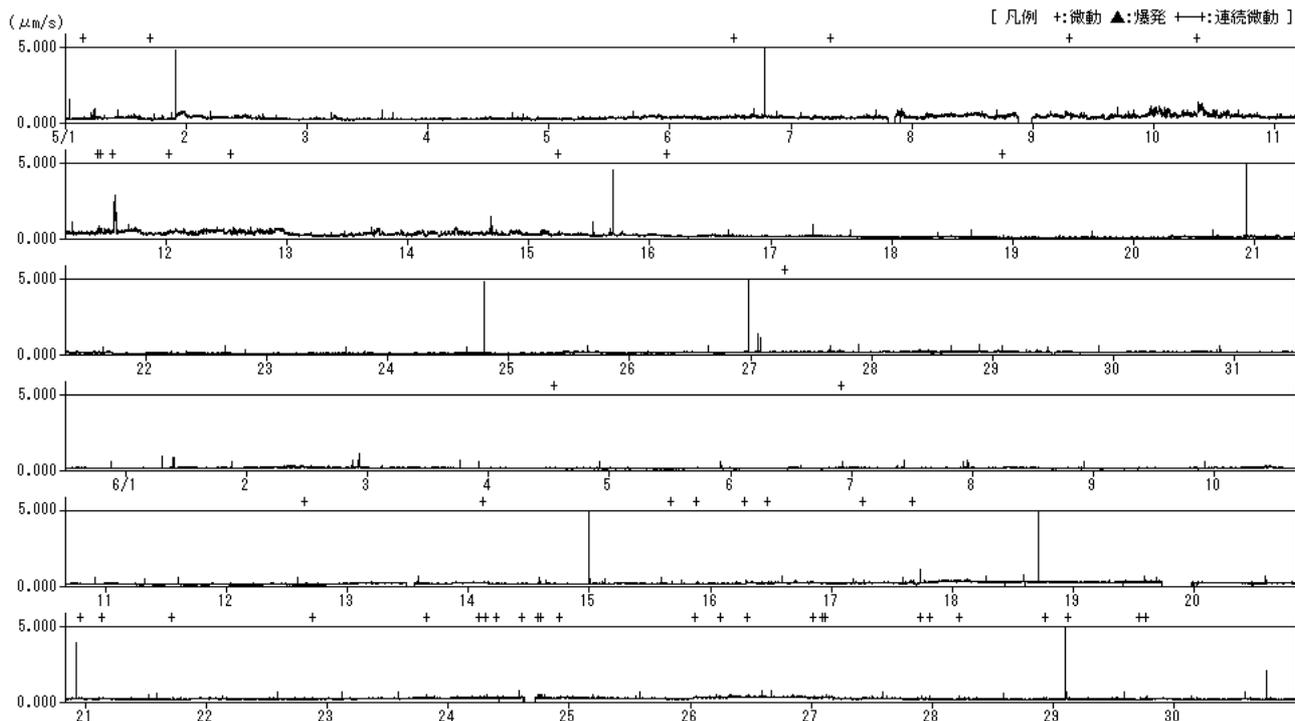


図 14 1分間平均振幅の時間変化(A点 N-S)(2002年5月1日～6月30日)

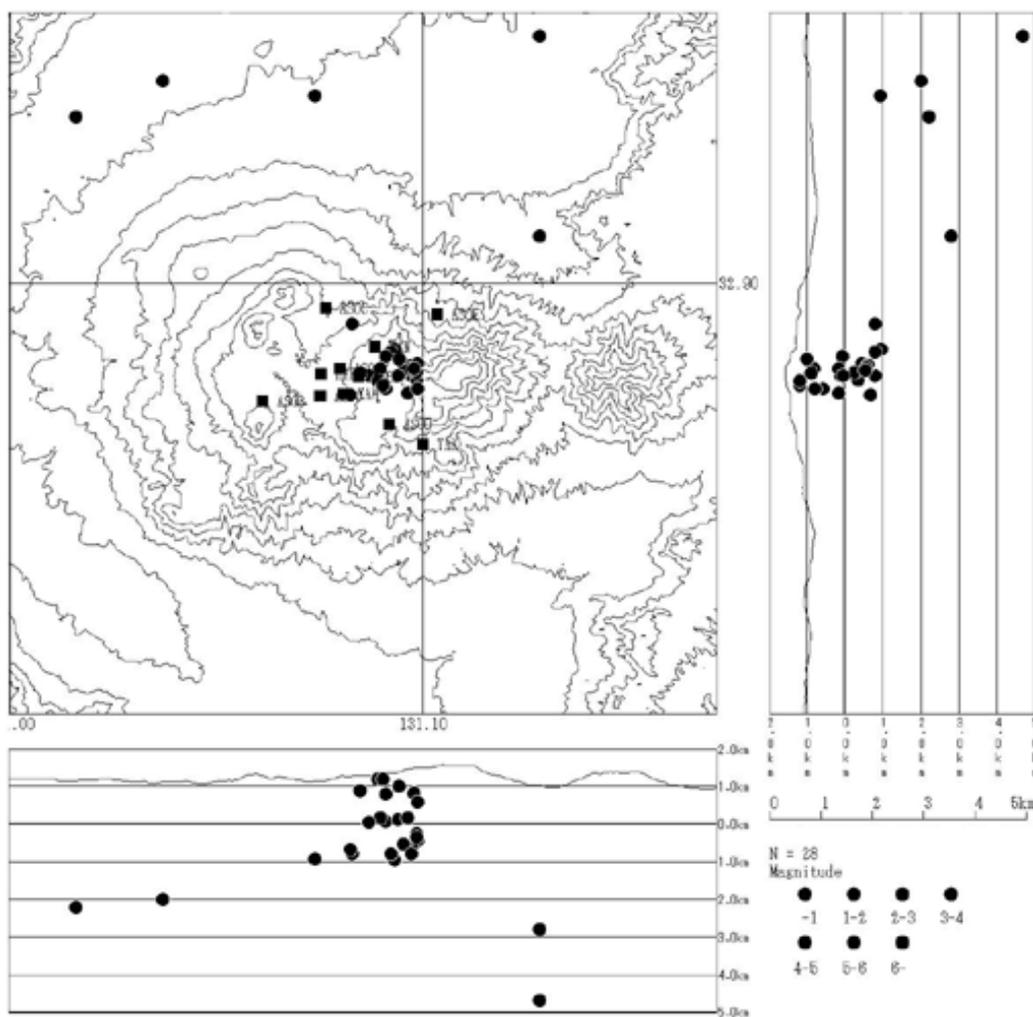


図 15 震源分布図(2002年5月1日～2002年6月30日)
(気象庁及び京都大学地球熱学研究施設阿蘇火山研究センターのデータを使用)

阿蘇山

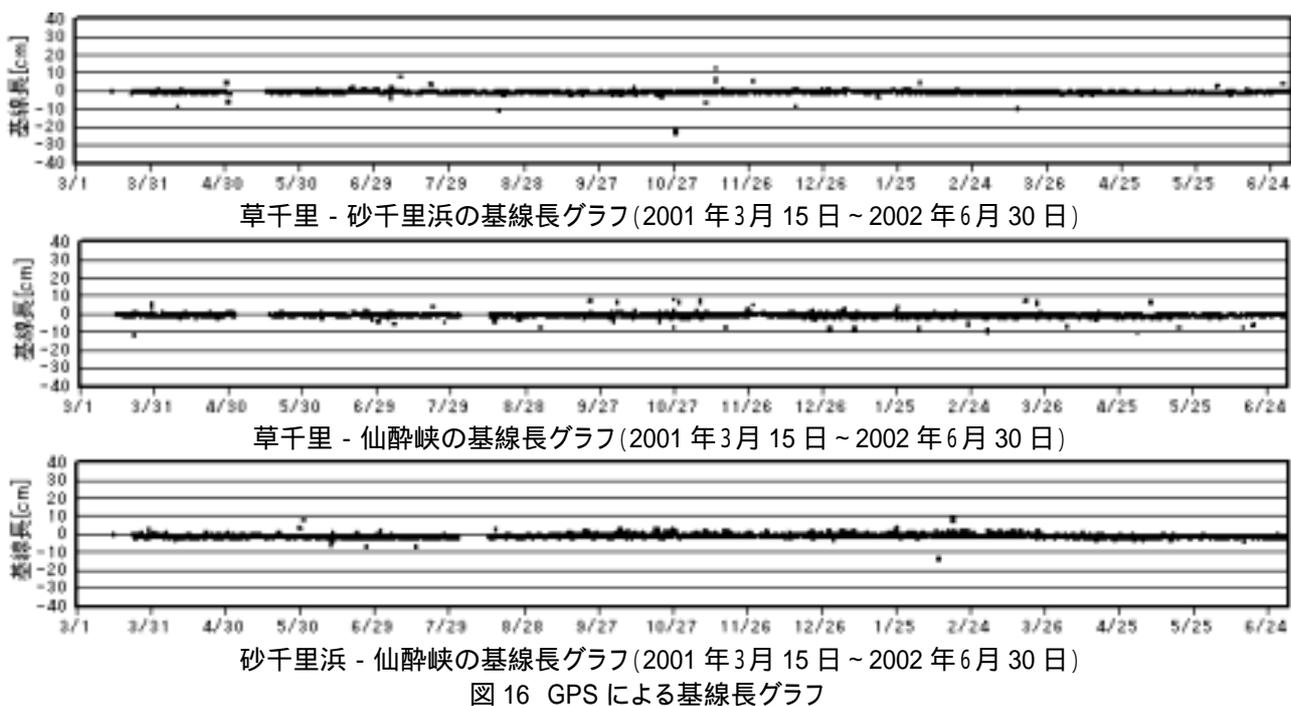


図 17 火口壁の赤熱現象(6月7日)

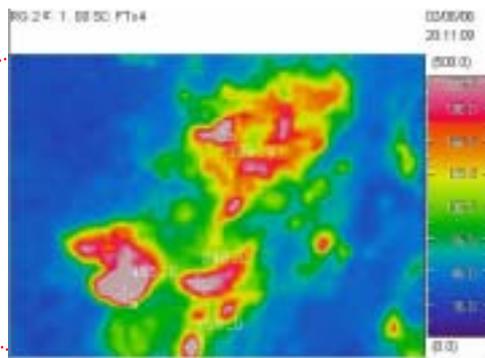
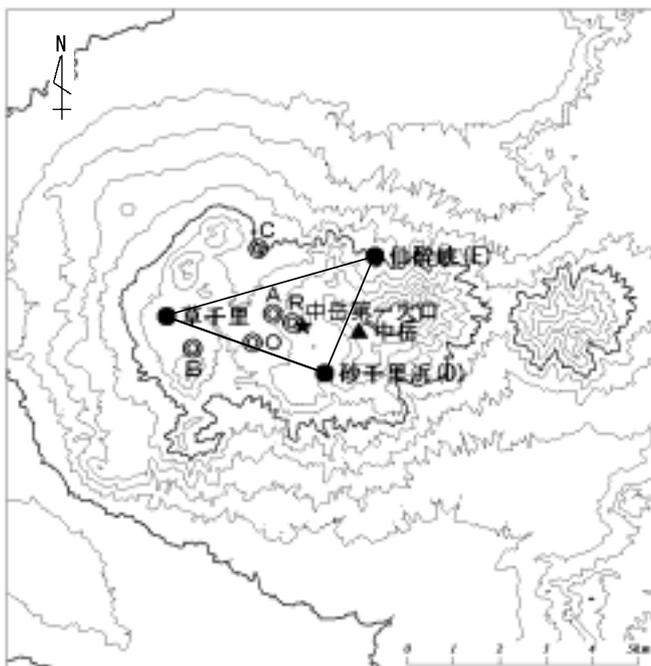


図 18 火口壁の熱赤外映像(6月7日)
(測定方法の違いにより赤外線放射温度計よりも高い温度がでます)



- 気象庁観測点
- 遠望カメラ 1 点 (草千里)
 - 地震計 6 点 (A ~ E, O)
 - 空振計 3 点 (E, O, R)
 - 傾斜計 1 点 (O)
 - GPS 3 点 ()

図 19 観測点配置図